電子複写不可

昭和一九、九、五～二〇年三月

# 独立混成第四旅団第三歩兵隊第天隊史料

（伊江島守備隊）

三冊之

防衛研修所戦史部

沖縄
317

三宅

無主市荒物町一〇番二六号
安田火災無主支店勧誘
主見重之代察賜

伊江島守備隊

此の小篇を南海の孤島伊江島に華々しく散つた幾多英靈の遺族に捧ぐ

# 伊江島守備隊

井川部隊、詳しくは独立混成第四十四旅団第二歩兵隊第一大隊

昭和十九年九月五日沖縄県国頭郡名護（クニガミナゴ）に於て編成さる。部隊長陸軍少佐井川正は大分県の人年令三十九才。部隊の根幹をなすは大分・熊本・宮崎・鹿児島四県出身の将兵約三百五十名にして、之れに加わるに現地召集の兵約三百名を以てす。編成と共に名護地区以北の防衛を任ぜらる。九月十九日より十月三日の間、伊江島飛行場設定工事に従事す。十月四日名護帰隊。十月七日本部半島（モトブ）・真部山（マブ）・崎本部地区（サキモトブ）防衛の新任務を受けて進駐す。十月十日第一次空襲（南西空襲）を受けたるも大隊の人員資材に損害なし、即日全部隊真部山及び遊撃高地に配備され陣地構築に専念す。十一月二十七日夜半突如として伊江島進駐の命到る。十二月一日伊江島進駐開始さる。此の日前日来の雨は稍々収まりたれども海上は尚荒れて「リーフ」（珊瑚礁）に砕ゆる波濤は物凄く、運命の島「伊江島」へ行く将兵の気持を衆徹する如くであつた。

伊江島は本部半島美濃崎を西に隔たる事四粁、東西約八粁、南北約四粁の大略楕円形の小島にて、東部の中央に宛然盆物の如くに裸の岩山が一つ坐つている。標高約二百米、村民は之れを一つの信仰の如く朝夕に仰いでいる。即ち伊江城山（イエグスクヤマ）である。此の山の外は全島は一様な平地で汎く耕されている。島の北岸一体は数十米の珊瑚礁の断崖が連なりその絶壁上の高地は見渡す限り蘇鉄の自然林が続き、紺碧の海は沖合の環礁に波立つて南海の孤島らしい風景を呈している。城山の南麓一体に部落あり、戸数約二千、人口七千五百、全島は何処でも

地下約一米に到れば堅い珊瑚礁が現われるに拘らず、芋甘藷、野菜は一年中豊かで近海漁業と併せて島民は安楽な幸福な日を送つて居た。

昭和十九年早春以来陸軍飛行場大隊が駐屯して此処に飛行場を設定して居た。

我が部隊は伊江島到着と同時に既に数ケ月前より同島に駐屯して居た独立速射砲並に独立機関銃の各一ケ中隊、計約二百を其の指揮下に入れて直に陣地の構築に着手した。此の平坦にして森も林もない小島に於て予想される敵の猛烈な砲爆撃に耐えて、優勢な敵を撃退するには地下の堅固な陣地に拠るの外はない。将校も兵も全員が珊瑚礁の山、珊瑚礁の土地に向つて夜も昼もない働いを続けた。此処でも資材類は我々を苦しめた。近代的機械は無論ない。火薬も鑿も鶴嘴も盤梯も常に不足不足であつた。毎晩遅く作業帰りの軍歌を聞き、寒い夜中に起出て行く兵隊に住民は深い同情の詞を漏した。然し我々には其の時既に無理とか過労とか言つている余裕はなかつた。「レイテ」の戦は友軍の奮戦に拘らず我々の期待の如くには進展していないらしく、年末頃からは「タクロバン」を基地とするB24が頻りに我々を偵察し始めた。南西諸島海域に於ける敵潜水艦の跳梁は益々猛しく、日本輸送船撃沈の報は相次いで我々の耳に入つた。「ルソン」に於ける敵軍優勢の報到る頃よりは敵機の偵察は愈々頻りとなり、敵の次期作戦地が南西諸島らしい気配が濃厚となつて来た。

昭和二十年一月二十二日には敵機動部隊による猛爆が伊江島の飛行場並に部落全般に汎つて加えられた。此の猛烈な空襲は丸一日繰返されて、学校を始め数十戸が全焼した。野砲隊長潮泡中尉（　　県）の避難壕も直撃弾を受けて破壊し、中尉は胸部顔面に負傷した。同様の猛爆は三月一日にも行われ、民家は次々に焼けて行き各戸を取囲む福木の緑は見苦しい赤茶色



に変つた。此の年の冬は沖縄に珍しい寒い冬で雨の日が多かつた。此の寒中を兵達は陣地構築の合間合間を肉攻斬込みの猛訓練に励んだ。何の娯楽もない此の離島に数々の困苦を詰めながら兵は不平も漏らさず実によく働いた。それは井川部隊長を中心として全員が一致団結し、皆が同じ労苦を味わい励まし合い慰め合つていたからである。将校は殆んど大部分が予備役の召集将校で、世の中の酸いも甘いも充分に味わつて来た四十才以上の人が多かつた。部隊長を始めとして将校も兵を共に石粉と泥濘にまみれて壕掘りに汗を流していた。

井川部隊長は支那事変の勇将で、胸間に輝く金鵄と負傷による独特の豪傑風の歩き振りは一見畏怖の感を抱かせるが、実は人情部隊長として兵隊は勿論住民からも敬愛を一身に受けていた。副官緒方中尉（熊本県）は「ノモンハン」戦の勇猛中隊長で鋭利な日本刀の如く冴えた頭脳を以て部隊長を輔け部隊を引締めていた。又配属独立速射砲中隊長諸江大尉（佐賀県）は典型的薩隼武士で、卓越せる識眼、恩威併び行う高潔な人格は将兵住民の信望の的であつた。部隊長を頭として此の三人が一身同体となり、最後迄部隊をカッチリと纏つて寸毫の揺ぎも見せなかつた。

二月上旬遂に公式にX作戦（天号作戦）の内示があり、沖縄が戦場となる公算は愈々増大した。之れを裏書きする如く敵機の偵察は益々頻繁となり渡久地に到る八汗の海峡の昼間航行すら危険になつた。夜になれば近海に頻りに怪火信号が望見された。住民の本部半島への疎開が軍により提唱されて、学童老幼を始めとして住み馴れた故郷を後に海峡を渡つた。将兵の顔には緊張と決意の色が日一日と強く刻まれて行つた。多くの将兵は故郷の母に父に妻にそれとなく別離の手紙を書き送つた。全員此の弧島を憤墓の地とする覚悟を堅めた。何故な

れば此の伊江島は、此の伊江島飛行場は軍事的に最も敵の目を惹く存在であり、又其の地勢は、余りにも守備に難く守備隊は其の敵に於ても、その装備に於ても、優秀装備を誇る米敵を撃退するには余りにも貧弱である事を皆よく知り抜いて居たのである。唯部隊長日頃の訓示の如く、全員生死を超越し全力を尽して一人でも多くの敵兵を一台でも多くの戦車を焼し、一日でも長く此の飛行場を敵手から守つて、仮令我々は伊江城山麓に屍曝すとも、之れにより沖縄本島に於ける友軍の作戦を神益せんと祈念した。

二月十一日の建国祭には雨の中を全員角力と演芸に一日を打興じたが、誰も之れが此の世に於ける最後の団楽となるであろうと言う一抹の哀愁を抱いていた。案の如く翌十二日より敵の有力機動部隊の情報が入り、其の進路が南西諸島に向い沖縄上陸の算大なりとの軍参謀情報に全員緊張す。畑や道路には爆発物が敷設せられ、十五日夜には隊長会同が召集せられ種々の打合せがなされたが、その席上敵の硫黄島上陸の報が入つた。硫黄島友軍の善戦勇奮に次ぐ悲壮なる最後の報を聞き、我々は訓練に陣地構築に一層の精進を続けた。

三月上旬の或る日、春らしい長閑な日影が斜く西の洋上に傾かんとする頃、聯隊長宇土大佐（長崎県）が本部半島の山中から海峡を渡つて態々我が部隊を訪ねられた。我々将兵は子供が久し振りで父親に会う様な気持でお迎いしたが、聯隊長は敵の攻撃が何時沖縄に向うかも知れぬ緊張した情勢下、部下を激励し同時にそれとなく別れを告げに来たものと察せられた。「任務上諸子と同じ戦場で戦う事との出来ぬのは聯隊長の深く遺憾とするところであるが、大隊長を中心として敢闘せよ。必勝の信念は決死の覚悟より生ずるものなる事を銘記せよ」その夜一同は聯隊長を取巻いて気点を上げた。

**三月上旬、情勢の緊迫に応じて防衛召集が発せられた。四十五才迄の沖縄県人が召されて伊江島にも配備された。その数約八百。茲に於て伊江島守備隊は我が部隊（配属中隊を含む）と防衛隊及び飛行場大隊（約二百名）の三部隊より編成され、各守備地域が決定された。即ち我が部隊は東飛行場より以東。田村飛行場大隊は飛行場地区、防衛隊は「山山（ヤマヤマ）」「マジャ」体の地区を夫々担当守備する事になつた（篇尾の地図を参照して下さい）。然し我々の部隊を除く他の二部隊は孰れも戦闘訓練も充分と言えず。殊にその装備は問題にならぬ程の貧弱なもので、小銃も少く小数の擲弾の外は手榴弾と急造箱爆雷、それに信じられぬ様であるが竹槍がその武器であつた。**

三月上旬の某日。晴天の霹靂の如く飛行場破壊命令が飛行場大隊に下達されて来た。東洋一の飛行場、北島に於ける失敗に鑑みて近代的立体飛行場を目指して着工以来満一ケ年夜昼強行で完成も漸く目前に迫り、侍攻の一ケ戦隊も近く来島するとの噂に兵も民も大に期待していた矢、自ら之れを徹底的に破壊せよとの軍命令、田村部隊長の胸中には察するに余るものがあつたであろう。算最高部の如何なる意向によるかは我々は想像の外にあるが、作戦上伊江島飛行場を使用しなくなつたのか、或は伊江島守備の困難性を認めての措置か、兎に角田村部隊と防衛隊は共同して建設に劣らぬ困難な破壊作業を開始した。

我が部隊の陣地構築は各中隊共孰れも一段落の感に達した。伊江城山麓より部落一体は一遍の地下要塞と化した観あり、十数米の地下に数十米の壕が縦横に連つた。作業の合間合間に兵達は宿舎雷を造つた。自分が拵いて軍機草の下に飛込む可き箱爆雷を黙々として造つていた。

4

軍の督促により住民の疎開避難は柏草をかけられ、約三千名が敵機を避けて暗夜の海路を桜つた。毎日の様にB29が無気味な偵察を行つた。破壊される滑走路の上を低空で旋回して行く。沖縄の三月はもう全く春だ。内地の四月末頃の暖かさで。鶯や鶴が啼き囀つて楽の実を食いに来た。人間の世に無頓着に自然は長閑な春であつた。

此の長閑な春の静寂を破つて惨憺たる死闘が突如として展開されたのは三月二十三日であつた。此の日朝からの晴天は時折り小雨を降らせていた。午前八時頃空襲警報あり乙号戦備が下令された。然し空襲は毎度の事であり、此の度も何日もの空襲に考えていた。唯敵日前に敵有力機動部隊が九州・四国方面を襲撃して豪南下しつつあるとの情報があり、或は之れが敵沖縄作戦の索敵に非ずやとの僅かの予感は誰も持つていた。唯常の空襲と異なり空襲は翌二十四日にも続けられた。然も二十四日の空襲は一日中執拗に繰返し繰返し行われて主として部落を焼払うかの如くに見えた。之れは少々可疑しいぞと思つている時、敵艦が島尻郡漢川（ミナトガハ）を整砲射撃しているとの情報が入り、続いて早くも敵の艦艇間列島上陸が報ぜられた。愈々来る可きものが来たのである。命令により全員部落内の宿舎を引払つて各隊の禁息壕に移り、戦闘に備えて各人身の廻りの整理を完了した。

翌二十五日。遂に敵上陸に備える甲号戦備が発令された。此の日始めて我々の目に敵艦が見え始めた。城山より見える南方海上には大小の敵艦が現われ、伊江島周辺にも哨巡、駆逐艦等十数隻が進出し始めた。敵も遂たぬ我も遂たぬ。戦気を孕んだ無気味な沈黙が島を覆うていた。南方洋上の敵艦は刻一刻その数を増し、やがて見渡す限り水平線上に小島の如き戦艦巡洋艦が敵に相模さんばかりに寄き合つた。正午頃から光芒一閃、耳を聾する艦砲の音が静寂な空気をゆすぶつて轟き始めた。殊波岬の彼方嘉手納方面を射撃しているらしい。

二十六日も朝来敵機の銃爆撃があり。然も正午過ぎから遂に敵の艦砲射撃が伊江島にも加えられ始めた。飛行場、部落。城山附近と到る処へ盲滅法に撃つて来るが、満三ケ月の血と汗で築いた我々の壕は予想以上に堅固であつた。直撃を受けた処もあるが損害は皆無であつた。然しこの艦砲射撃と爆撃により部落の大半は破壊し焼き払われた。家を失い敵弾下に曝された住民は軍の壕や海岸の自然洞穴中へ避難した。二十七日軍参謀部並に連隊本部よりの情報として、敵上陸予想地点は主力を以て嘉手納。伊江島等より上陸する事大なりと。

二十八日午前四時頃全員集合を命ぜられ、東天のほかに明らむ方を拝しながら「天一号作戦は皇国安危の決するところ。。。。。。」と言う。皇旨並に参謀総長の激礼の詞を拝受した。

夜が明けるや否や敵機は日課の様に一日中島の上空を旋回し、何か変つた物を見つけると狂つた様に掃射する。敵艦は日毎にその数を増し。殊に殊波岬の海上は敵艦を以て蔽われ、水平線は霞彩で全く埋まる有様である。伊江島より肉眼にて数えうる巡洋艦以上の巨艦は常に六七十隻に達していた。よくも之れ程待つて来たものと呆れるばかりである。之れが帝国海軍であつたらなゝと兵達は嘆息した。

敵の上陸開始の機は未だない。敵は恐るべき慎重さを以つて此の作戦に取掛つている事が推察される。硫黄島での大損害に懲りて、徹底的な予備射撃を行つているのであろう。それにしても敵来襲以来既に廻日越すのに唯一機の友軍機も我々の目には映らず、聯合艦隊出動の報もない。唯二十八日の払暁前、暗夜の南方海上に物凄い防空砲火を見たのみである。又夜に

なれば折からの月明の洋上を夜目にも白い航跡を引き「エンヂン」の音を高く立て、友軍の〇〇（水上特攻）と思われるものが小数、本部半島の方より伊江島の前を通つて南の方へ消えて行くのが認められた。昼間見た敵輸送船の隊勢さに比して、それは余りにも微力に思われたが、それ丈けに余計に悲壮であり、見送る我々の胸に熱いものが込み上げた。敵沖縄来襲の折はその艦船の大半を海上に於て葬るであろうと聞かされた戦前の話は何日実現するのであろうか。

四月一日遂に敵は一部を以て湊川方面に欺陽動を行いつつ大挙、嘉手納、北谷の正面に上陸を開始した。その前日来両方面に加えられた艦砲射撃の猛烈さは言語に絶した。遥に望む残波岬の彼方は飛上る土砂と凄々たる煙に一面に覆んでいた。

斯くて伊江島は我々の予想に反して、敵の第一次上陸から取残された。上陸軍と友軍との戦況を毎日壕の中で聞いた。日と共に壕中生活にも馴れて来た。兵の顔は延び、顔色は白くなつたが士気は益々旺盛であつた。福山主計中尉（熊本県）の努力により、今迄の不足勝の給与に比して豚牛鶏類が毎日兵の旺盛な食欲を満足させた。昼間は常に上空に敵機が舞い、夜になれば島の周囲の砲撃から砲弾が飛んで来るので、一歩壕の外に出れば何時でも生命の保証は出来ないが壕の中なら先づ安全である。敵の伊江島上陸は既に時日の問題である。敵を前にして将も兵も悠々と最後の準備をした。陣地の仕上げ、武器弾薬の整備、それから第一に穴居生活で健康を害さない様に細心の配慮が払われた。最後の覚悟は既に伊江島進駐時から出来ている。誰も今更それを問題にする者はなかつた。

三月三十一日の夕方、井川部隊長を取巻いて本部の全員と各隊の一部の者が会食を催した事



がある。場所は城山中腹にある戦闘指揮所前の斜面で、松も粗な処として眼前に遮戈する敵艦にも時折り廻つて来る敵機にもよく見える。然し誰もそれを恐れる者はない。後くんを帯びた部隊長は得意の安来節を踊り、稲方曹長は十八番の黄金虫を舞つた。爆笑は全員の腹の底から湧いて意気は敵を呑んだ。徐宏軍曹は法の切り株に片脚を掛けて眼前に浮ぶ敵艦に小手打ちかざし「ヤアヤア遠からんものは音にも聞け、近く寄つて眼にも見よ、我こそは。。。」と素晴らしく太い声で叫び掛けた。「五条の訓辞（オシエ）」を終わって福山主計中尉に合せて全員の歌う戦陣訓の歌声が松影深く漲くなつた伊江城山麓から黄色に暮れ行かんとする夕闇の中へ消えて行つた。

四月三日には夕方待ちに待つた友軍特攻隊が来た。物凄い弾幕の中を次々次々に突込んで行く。忽にして北方海面で轟逐艦らしきもの四隻が黒煙を上げ、南方では巡逐艦一隻が傾倒、他に二本の黒煙を認めた。然し我々の眼上で友軍機二機が敵戦闘機六機に取巻かれて、火を吹きつつ無念にも度久地海峡に墜落して行くのを兵達は地団太を踏んで口惜しがつた。其夜兵達は昼間の特攻隊を語り、おれ達も何時死んでも心残りはないと話し合つた。

情報によれば嘉手納に上陸した敵軍は本島を両断して南北に進み、北は既に名護に迫り南は三本の道を併進して、東海岸は中城村津堅に到つたらしい。大隊高級軍医比嘉中尉は津堅の自分の家が今頃敵の焼火を浴びているだろうとつぶやいた。妻子を戦場に残して離島に戦う沖縄出身軍人の心情を察して誰も慰める言葉もなかつた。

掃海艇は毎日の様に伊江島通辺を掃海し、度久地海峡にも敵雷が入つて来た。高射砲も巨砲も持たぬ我々には爆行機や軍艦には手も足も出なかつた。西岸燈台附近に分遣されていた永

徳小尉（鹿児島県）指揮下の兵隊は余りの口惜しさに接岸した敵駆逐艦に軽機を射つた。敵艦からも軽機で応射して来た。彼も可笑しかつたのであろう。

四月八日午后三時島の上空を旋回していたB24二機が島の東部墓地に数発の爆弾を下し、その一弾が松岡伍長（　　県）の率いる一ケ分隊が陣地としていた墓地に直下し、折から夕食中の同分隊員を埋めた。幸にも吉岡一中隊長、緒方副官、児玉軍医等が一中隊の兵と共に駆せ付け、敵弾下で必死の掘出しを行い、八名を救出したが松岡伍長以下四名は遂に無惨な戦死を遂げた。我が部隊草初の尊い犠牲であつた。情報によれば敵は名護より本部半島に進み、一部は伊豆味を衝き、我が隊本部へ背後より迫る気配を示した。四月十日隊長より大隊長宛て「愈々眼下に敵を見る」との電話あり、戦況を気使つて其後隊本部に対し幾度も幾度も情況問合せの無電を発したが、本部からは何の感度も無かつた。新くて我々の部隊と隊本部との連絡は茲に全く途絶してしまつたのである。

ラジオによる大本営発表によれば沖縄周辺に群る夥しい敵艦船の数は千四百隻に上り、我が陸海特攻隊は全力を之れが撃滅に尽しているらしく連合艦隊も遂に出動したらしい。四月十日頃迄の敵艦船の損害は計四百隻に達するとの事。その為めか否かは分らぬが伊江島より望見される艦船総数は幾分減少した様である。然るに伊江島周辺の敵艦は四月十日頃より漸次増加し、既に周囲の海は完全に掃海されて済つた。四月十三日頃には敵駆逐艦が水納島（ミンナ）に停泊したらしい様子である。一日中二十六隻三十隻が遊戯して我々を監視している様である。十三日には敵艦及び巡洋艦を含む二十隻が取巻いていたが、正午過ぎその戦艦の放つた巨砲弾が城山南側中腹にある第一機関銃中隊（以下一機）の壕見壕に直撃して之れを崩壊せしめた。報により繕方副官が本部員を率いてその救出に当つたが、其処は敵艦より丸見えの箇所であり、敵が盛に射つて来るので作業は困難を極めた。壕にいた中隊長満留中尉（宮崎県）及び四五名の兵達は幸に自力で脱出したが、中には堂園少尉（宮崎県）以下十三四名がいるのだ。その大部分は圧死を遂げているらしいが、一部の生存者ある見込みで危険を冒し救出作業を続ける事約四時間に及んだが、盛砲射撃が益々猛しくなるので止むなく一時中止せざるを得なかつた。此の作業中に今度は城山の西側中腹にある独立機関銃中隊（以下独機）の壕にB24の投下した五百瓩爆弾が直撃して、岩石で出来たその頑丈な壕を圧しつぶした。巨大な岩盤が落下して救出は到底不可能であり、中にいた部隊長以下約二十名の兵と両名の女子救護班員は恐らく即死せるものと思われた。実に悪い日であつた。其夜再び一機の救出が行われ、堂園少尉以下五名が奇跡的にも無事救出され、河野伍長等の死体が発掘された。更に翌十五日朝最後の二名が救出された。殆んど二十時間生埋になつていたのである。

四月十五日朝来伊江島周辺の敵艦は戦艦三隻を含む大小五十隻が数えられ、伊江島全周を取巻いて物凄い砲撃を開始した。投弾は海岸線、飛行場、城山、部落と殆んど来ぬ所はない有様である。殊に此の日の弾は口径が大きい為めか今迄の砲撃ではビクともしなかつた各壕が一日中恐ろしく揺らぎ通けた。敵砲艦の射出する「ロケット」弾は一秒十数発射速度を以て急調子の太鼓を打つ様に鳴き続けた。百雷が一時に落下するときは正に此の様な事であろうかと思われる物凄さで、此の艦砲射撃は十五日一日中続いた。夕方辛く壕を出て仰いだ伊江城山は何時の間にか全く別の山の様になつていた。山頂より麓に到る木と言う木は

一本も残さず吹飛んで。岩は割れ落ち土砂は飛び散り、到る処に弾痕が大きな口を開けてゐた。地上の物は悉く跡方もなく吹き飛り、各部隊、各隊間の有線連絡は絶えた。山頂より見下す部落は見渡す限り廃墟と変り果てていた。此の砲撃は只事でない。愈々敵の上陸が今明日に迫つたものと推察され、之れに備える各種の命令が各隊に伝えられた。遊谷及び山々に分遣されていた各二ケ分隊は防衛隊に任務を引継いで引上げて来た。

明くれば四月十六日、此の日払暁より前日に優る猛烈な迫砲射撃が始まつた。壕から一歩も出られない程無茶苦茶に射つて来る。晴天である筈の空は気味悪く黄色に霞んでいた。

午前十時頃田村部隊より下士官の伝令が此の弾雨下を息を切らせて戦闘指揮所へ馳せつけた。其の報告によれば、敵は十六日払暁より中飛行場南端附近の山々海岸に上陸を開始した。払暁よりの猛砲撃で田村部隊も防衛隊も壕から出られなかつたが、妙な「エンジン」の音が聞えるので見ると既に敵戦車は壕の前に迫り、一部は中飛行場附近にも進出しているのを認めた模様である。或る壕の如きは気付いた時は既に敵が馬乗りとなり手榴弾を投げ込んで来たらしい。田村部隊の柴田少尉はも早是迄と小隊を率いて敢然壕より躍り出て戦闘を交えたが忽ちにして全員壮烈な戦死を遂げたりと。

敵上陸の報を持つて伝令は各隊へ飛んだ。直に兵は陣地に付いた。最早や我々は田村部隊や防衛隊の敵を踏まんぞ。井川部隊長、緒方副官、作戦主任諸江大尉の三人は悠々として作戦を練つた。落着き払つた会話が続く。「生死、勝敗は問題でない、唯死んでも海のない面白い戦争をやろう」部隊長は髭を捻しつつ莞爾と微笑む。各隊より伝令が帰り、各中小隊長以下張切つた各隊の情況が報告された。午後一時過ぎ城山南麓の独立速射砲中隊（以下独速）の陣地より、敵中型戦車数輌が城山西方一帯辺に出現して東進中との報告あり。之れに連絡を送る如く、城山西方七百米辺に近接せる戦車四輌のうち三輌は我が速射砲の的確な射撃により瞬く間に擱坐し、他の一輌は慌て退かんとして我の数設したる小機雷に引掛つて飛び散つたとの快報が入る。其後も同方面には随伴歩兵を伴う敵戦車十数輌が現われたが怒れをなして近寄らず、南北に移動するのみ、島の周辺は敵船で取巻かれている。上陸軍の詳細は尚不明である。戦闘第一日は漸くて漸く暮れて行つた。其夜上陸軍の詳細を偵察する為め、三中隊橋本少尉（　　県）を長とする将校斥候が山口方面へ発せられ、同時に各隊四連B至七組許の最初の斬込隊が戦友に別れを告げて、旧暦七日頃の上弦の月ほのかに照らす夜の野へ出て行つた。我々はその夜半より払暁にかけて西方一帯に銃砲声の物凄しい中に何度も何度も爆発音を聞いた。

四月十七日晴天、敵は昨日水納（ミシナ）島へ砲六門を揚陸したらしく、朝来盛砲と合せて盛に城山地区へ射込んで来る。早朝田村部隊の将校下士官、兵数十名が我が戦闘指揮所へ退つて来た。その話によれば部隊長田村大尉の壕も十六日敵に馬乗りされ、その夜脱出して敵の包囲下に陣取り、生死不明との由。その後田村部隊も防衛隊も専ら斬込隊を出して奮戦している由。昨夜の我が斬込隊は其後帰つて来た兵の報告によれば大部分東飛行場方面に到り、約半数は接敵に成功し敵戦車及び幕舎に爆雷を投入した。各隊共爆雷を抱いてその盛戦車の下に潜込み、戦車と共に華々しく四散した数名の下士官兵が報告された。その確認されたる戦果、戦車七輌擱坐幕舎三破壊、敵兵損害の詳細は不明なり。山々方面へ出た橋本少尉以下は敵中深く潜入して偵察中遂に敵の重囲に陥り、橋本少尉は重傷を受け、恐らく戦死せるものと思われる

との報告が辛じて脱出して来た兵によりもたらされた。敵は山々海岸、中東飛行場附近に多数の幕舎を張り、既に一部に候敵警戒を設置し、戦車を並べている。その兵員大約三千なりと。十七日午前十時頃より大型輸送船約七十隻を中心とした敵の大船団が伊江島南岸の海上に浮かつて来た。間もなくそれらの船から数え切れぬ程の上陸用舟艇、水陸両用車等が出て来た。盛砲射撃は更に熾烈となり、その砲煙の中に敵が新波止場より旧波止場に至る南岸一帯に新しい上陸を開始するのが手に取る如く望見された。その満船の夥しさを眺めて、歴戦豪気の緒方聞官も流石に言葉を飲んだ。水納島一体の海面は全く満船で埋まつているのだ。波止場正面を守備している三中隊よりの報告によれば敵は兵員及び飛行場設定機材らしきものを揚げつつあり、兵員は約六千名を推算された。三中隊及び一機は陣地より之れを攻撃して敵兵の斃れるのが手に取る何くに見え、痛快な戦闘をしているとの報告。

井川部隊長更及び聞官は弾雨中を戦闘指揮所へ来た諸江大尉と共に熱議三十分間、敵の優勢来だ整わざる今夜半を期して全部隊の三分の二の兵力を以て此の新手の敵に対して夜襲を敢行之れを海中へ撃退する事に決した。兵達は守つて死ぬよりは攻撃して華々しく散る事を希つていたので、此の命令を聞いて皆勇んだ。一機中隊長満留中尉は泳ぎ上手の部下数名を…れて今夜水納島へ泳ぎ渡り、其処の砲を爆破せん事を大隊長へ見申し、諸江大尉の支持を得て爆雷と自動車のたいやを持つて出て行つた。敵戦車群は城山西方へ来ていたが其辺を徘徊するのみで近寄らない。部隊の重火器の大部分が西方に向いているので、同方向から敵の来るのは我の思う壺であるが、敵は昨日の痛打に懲りて西方一体に候敵警戒器を設置して近寄らない。午後四時頃三中隊より戦死を伝えられた橋本少尉は負傷せるも元気で兵に助けられて無事脱出帰隊せりとの知らせがあつた。夕方頃には敵の斥候が部落西端方面に出没して来た。其夜淡い人影が三々五々靴音もしのびやかに黙々と城山の黒い影の中から西方へ敵つて行つた。其の跡兜は綾の三角巾で包まれて淡い月光の反射すら防がんとし、軍刀の鞘を巻いていた白い包帯も取り除かれていた。今は其処の木蔭に此処の戦れた家跡に敵の斥候が潜んでいるかも知れないのだ。兵達の交す「神」「風」の合言葉も低い。時折り砲弾の落下する中を各隊の命令された攻撃準備地点へ各個に急いだ。三中隊と一機はその既設陣地にて新波止場に向い一中隊は旧波止場に対して陣取り、二中隊は三中隊の西に続き、独機は三中隊陣地に加わつた。部隊長は聞官以下本部の兵を以つて新波止場を眼下に見る学校高地に来つた。

9

比嘉、児玉両軍医の率いる衛生部は三中隊の後に包帯所を開設した。上弦の月漸く傾いた十八日午前二時頃より各隊一勢に銃火を開いた。重機を主とし、豆を煎る様な凄しい銃声が暗夜の静寂を破つた。我が攻撃主力は新波止場上に向けられた。我が奇襲に驚いた敵は暫時応戦もして来なかつたが、間もなく狂つた様にあらゆる火器を射つて来た。野砲、迫撃砲それに海上に在つた夥しい軍艦の艦砲が一勢に我方に向つて火を吐き始めた。殊に我が重機陣地には盛砲弾が雨下し、戦闘約一時間にして其の二銃は破壊され、其処にいた十二名が負傷して包帯所に運ばれその四名は戦死を遂げた。戦闘は尚激しく継続せられたが敵の猛弾雨は我に波止場の平地へ近附く事を許さなかつた。然も敵戦車は暗夜を利して我が陣地を通過し来たり砲銃撃を加えた。之れに対し我が肉攻も木蔭から飛出して爆雷を投げその二輌を破壊した。そのうち東天漸く白む頃となつたので、部隊長は全員に攻撃中止、引上げを命じた。此の夜襲により我に前記の独機の犠牲の外に各隊数名宛の戦死者を出した。敵にも相当の損害

を与えたに相違ないが暗夜の事とて確認するよしもなかつた。

夜が明け放つて翌十八日も晴れ渡つた好天気であつた。昨夜微宵の夜襲戦から疲れて各隊陣地に帰つた兵達にゆつくりした休養の時間は殆んど与えられなかつた。敵は午前十時頃から我に対して本格的攻撃を加えて来たからである。その主攻正面は三中隊一線の守備している学校高地である。城山西方の敵は依然近寄らず、南へ廻つて部落南西端より二中隊（鹿児島県）の守備正面を衝かんとする態勢を取り、又北へ進んで城山を遠く北方より迂回する如く北海岸寄りに東進した。昨日新波止場に上陸した敵は主力となつて南方より部落及び学校高地を攻撃し、更にその一部は南海岸寄りに東進して東海岸に進み、其処より城山方面を衝かんとして高野少尉（熊本県）の拠れる女山より東方に連なる一連の基地の陣地の正面に現われた。敵の主火器は戦車約百輛を主体とし、その後方に多数の砲を据えていた。物凄い銃砲声と硝煙、鼻を衝く烟硝の臭いが伊江島東半部を厳い包んだ。敵機は始終低空して地上の敵に協力した。友軍は暴露すれば敵機から掃射されるか或は敵機の通報により迫撃砲弾の雨を浴びねばならずと言つて敢に引込んで前方から目を離せば地上の敵はその隙に戦車を以て一挙に我が陣地を蹂躙せんとする勢である。対戦車砲は不幸にも南方には向つていない。飛行機と戦車を持たぬ軍隊は近代戦に於ては実に苦しい惨めな戦闘を強いられるものだ。敵主攻正面に立つた平良（タイラ）中尉（沖縄県）の率いる三中隊は此の困難な中にあつて実に立派な奮戦を続け、高地に迫る戦車群を重機と擲弾筒と肉攻で防ぎ高地を固守した。中釜少尉（鹿児島県）吉見少尉（熊本県）も中隊長の留守を引受けて青年将校らしく張切つて勇戦した。敵は潮の如く押し寄せたが、我が逆反撃に進出不能となつて退いた。その退いた後へ迫撃砲



と榴砲の弾が雨下して来た。友軍は此の弾雨に包まれて動けなくなつた。斯様な死闘が十八日中幾度も幾度も繰返されて、我軍は学校高地を確保していた。との激闘に我方にも戦性が続出した。学校高地の手強さに敵は次第に東漸して女山、墓地の陣地に戦車約二十輛を以て押寄せた。高野少尉は自ら陣頭に立ち、軽機と擲弾筒を以て防いだ。庶務物の少い其の辺の防禦は困難を極めたが責任感の強い既に死を決した少尉以下三十余名は弾雨の中に敢闘した。城山の戦闘指揮所より之れを眺めている井川部隊長以下皆声を飲んでその善戦を思つた。午後三時頃一中隊より伝令あり、北海岸を東進して来た敵戦車約十輛は十八日一〇時過ぎ「ミヤト原」に分遣していた浦田中尉（鹿児島県）指揮の二ケ分隊及独歩一ケ分隊の正面に来襲した。中尉以下肉攻を以て之れに猛攻を加え防戦に努めたが背後に廻つて来た敵歩兵部隊との間に挟撃され、前田中尉及びその部下の大部分が華々しい戦死を遂げたりと。将校の最初の犠牲であり元気その物の如き前田中尉の壮烈な最期を部隊長は静かに肯きつつ聞き入つていた。

斯くて激闘に明け暮れた十八日は友軍の善戦によりよく敵を抑えて夕暮遅くなる頃砲声も漸く少くなつた。其夜も偵察斬込みが出たが東西南三方の敵は候敵警戒器を没収し足音をしのばせて間い寄るかすかな物音にも否焼け残つた枯木にそよぐ微風の音にすら敏感、迫撃砲を乗注するので容易に近寄れない情況であつた。

十九日も晴れてやわらかな日光が此の変り果てた荒涼そのものの新戦場に注いでいた。敵は早朝より再び昨日と同じく学校高地及び女山墓地陣地に対して猛烈な攻撃を加えて来た。昨日の激闘に不眠不休、乾麺包を噛んで奮闘している兵は眼は落込み陥んで、烈々たる闘

志をたたえた顔は初夏い面相を呈している。殊に第三中隊及び一機は敵猛攻の正面に立つて連日連夜の死闘に死傷者漸く多く、その所有弾薬は欠乏を告げる情況にあつた。此の日三中隊長平良中尉は今日こそその陣地死守の日であるとて指揮班員と遙かに皇居を拝し、万歳を奉唱して戦に臨んだ。敵のこの日の砲撃は地上のあらゆる物を掃き去るが如き猛烈さで、砲弾の嵐を戦車の前に立てて進んで来た。三中隊も高野少尉も昨日と同じく死力を尽して戦い続けたが午前十時頃には敵は遂に学校高地に進出して来た。此の高地より伊江島最後の陣地たる伊江城山の複郭陣地迄は僅か三百米にして我が戦闘指揮所を指顧の間に望み他の諸陣地を目下に見下す要地である。これを敵手に委ねる事は既に我の壊滅を意味する。敵遂に学校高地に現われるの報を聞くや独速隊長諸江大尉は自ら部下を率いて学校高地下の平地に進出した。二中隊の一部も之れを俺護してその西方に続いた。敵に蹂躙されたが三中隊一隊の将校は四周を敵に囲まれながら尚その陣地を死守して奮戦していた。彼我の距離は学校高地の上と下、僅かに三四米に過ぎない。敵も後方からの砲撃は不能となり、我が援軍を遮らんとして城山方面に砲弾を集注した。此の隙に諸江大尉を先頭に兵は学校高地の北斜面に取り附き、戦車砲の間隙を見て手榴弾を高地上の敵に投げつけた。敵は此の我が決死の攻撃に恐れて遂に高地上より後退した。その退いた後へ今後は砲弾の雨が降つて来た。平良中尉は此の砲弾の雨の中に遂に名誉の戦死を遂げた。報により副官諸方中尉は諸江大尉の安否を気づかつて単身高地に急せ付け大尉と共に指揮を取つた。この時高地と女山の中間の道より進出して来た敵戦車の射撃を側背に受け、その一弾は諸江大尉の左下腿に命中した。鮮血に染りつつ大尉は尚指揮を続けたが、副官と部下の願い



により遂に後退した。大隊長は永徳少尉（鹿児島県）指揮の大隊予備隊及び生森少尉（熊本県）指揮の大隊本部員に学校高地の救援増強を命じた。後退して来た田村部隊の将兵もその戦闘に加わつた。戦闘は其夜十時に到る迄継続され、独速の力闘により奪回した高地一帯は我が手に確保されたのである。

他方東海岸を迂回し、墓地陣地の北方を通過して西進した敵戦車約十輌は城山にある一中隊正面に猛撃を浴せて来た。吉岡一中隊長（熊本県）は森少尉（鹿児島県）指揮の一ケ小隊を以て堅固な既設陣地に拠つて防戦した。

此の日朝城山戦闘指揮所附近は敵の砲弾の雨の中に煙つていた。敵の発煙弾が飛込んで壕中は蒙々たる白煙が立ちこめ煙硝の臭いが鼻を衝いた。曳火弾が盛に壕に這入つて来た。壕の入口の岩石が崩れ落ちる。兵達は多少動揺した。敵が壕上に馬乗りするのを恐れたのである。各自手榴弾を握り、鉄兜の緒を緊めた。「早く壕から脱出せぬと壕内で犬死するぞ、ぞ、早く出よ」と叫ぶ者がある。その時井川部隊長は朝食の膳に向つていたが箸を早める事も無く静かに食べ終えた後、例の太い声で兵達を制した。「皆何を慌てるか、既に生死を超越した者は何事が起ろうと騒ぐ事はないではないか。然も俺の考えるところ敵は未だ左程近く来る筈はない。諸方副官情況を見よ」壕の入口に立つていた副官がやがて学校高地、女山の線は尚友軍が確保している事を報告した。兵達は漸く平静に返り始めた。此の時壕の中から朗々たる福山中尉の歌声が聞えて来た。「……敵火交うる幾星霜、七度輝く感状の勲の蔭に涙あり嗚呼今は亡き武士の笑つて散つたその心……」兵達が何時となくそれに和して口ずさみ始めた。壕の外には依然として言語に絶する弾雨が我々の壕に注いでいたが、壕

の内には最早何の動揺もなく、此の部隊長と共に悠久の大義に生きんと誓う兵達の澄み切つた歌声のみが続いていた。

然しこの騒ぎで最後と頼む無電機が破壊されて済つた。全員玉砕の最後の場合軍司令部（報告する電文も既に副官により用意されてあつたのに今は此の小離島に於ける悲壮な奮闘の模様を誰にも伝える事が出来なくなつたのだ。勿論誰も功を求める気持は寸毫も抱いていなかつた。然し部隊長としては先輩として死んで行く部下の心境を思い遣つて此の戦闘の経過を此の最期の有様を上官に遺族に伝えたかつたのであろう。砲声韻々たる壕の入口で児玉軍医に向い最後の突撃後若し出来れば本部半島へ渡り、聯隊長に戦闘経過を報告する様に話していた。其夜児玉軍医は衛生兵を引率して負傷した諸江大尉を始め、独速二中隊の将兵の治療の為城山を下つた。左下腿盲管銃創で横臥していた諸江大尉は平常通りの静かな調子で児玉軍医に話した「どうせ明日一日あればよい体ですから痛み丈け止めて下さい。此の壕の直ぐ西には敵がいるから二中隊へ行く途中は注意する様に……」夜の戦場は敵が間断なく打ち上げる照明弾により昼をあざむく如くである。敵砲弾は間断的に落下して、その破片がヒュルヒュルヒュル」と気味悪い音を立てて落ちて来る。斯くて激戦第四日の夜は更けて行く。

二十日の朝は爽かな晴れ渡つた朝であつた。静かに目を閉じて耳を澄せば小鳥の囀りが聞える。それは戦争前の平和な樹蔭に戯れていた小鳥の声と少しも変らない。一瞬身が戦場の外にある様な錯覚に襲われる。然し一度眼を開いて見る光景は何処が部落か何処が畑か見分けも出来ぬばかりに荒れ果てて硝煙の臭いは土に泌み込んでいた。

昨夜命令が発せられて今日は西方に対しては一部の兵力のみを残し他は全力を以て学校高地



大山の麓に向う事になつた。壕内の連絡砲も薄暗中隊指揮の野砲一門も今日は陣地から引出されて南方、東方の敵に向けられた。今は敵戦車上を低回しても誰も恐れない。此の日敵も総力を挙げて学校、墓地陣地方面に強引な攻撃を加え来たり。午前既に学校高地に戦車及び砲を並べ、我方に拝みうちを加えて来た。敵の砲門から出る火がすぐ目前に見られる。

二中隊長大崎中尉（宮崎県）は昨夜徹宵で陣地の整備、兵の区処を行つていたが此の朝治療している児玉軍医に「愈々今日が最後ですね、よく今日迄頑張りましたね」と静かに語りながら壕を出て行つた。児島少尉（鹿児島県）もその柔和な童顔を流石に緊張させながら「班長行こうぜ」と言いつつ銃声繁い学校方面へ出て行つた。

今や戦線は敵味方入り乱れ、敵戦は低空しても絶たない。唯戦車砲を無茶苦茶に射つ。既に友軍の弾薬は各隊共に欠乏していた。手榴弾も多くは残つていなかつた。二中隊指揮班員を率いて学校正面に進出して奮戦していた大崎中尉は正午頃敵弾を受けて斃れた。最後迄その陣地を死守していた三中隊橋本少尉、浜田軍曹も重傷を負ひて悲壮な最期を遂げた。永徳少尉、堂園少尉の戦死の話も伝えられた。墓地陣地の北側を通つて城山へ移進する戦車群を側面より攻撃していた高野少尉の中隊になつた胸部に敵の機銃弾が命中し、少尉は坐つたまま華々しい最期を遂げた。児島少尉も敵弾を受けて重傷した。午後からは敵は西方からも攻撃して来た。之れを邀えて草牧中尉（大分県）指揮の二中隊の一ケ小隊と独速独機の兵は必死に防戦した。此の時独速小隊長山下少尉は銃眼より飛来した戦車砲弾を頭部に受けて即死した。同じく向山准尉も路上に於いて敵弾の為め散つた。中釜、吉見両少尉の消息も連絡がなかつた。下士官も兵も次々に斃れて行つた。我軍血みどろの苦戦のう

ちに日は漸く西に傾きかけた。敵戦車群の取巻く鉄環は既に此時には城山を取囲む直径約三百米の円周をなしていた。

夕方五時頃右手に抜味の単力を提げ、左手に拳銃を持つた野口少尉（鹿児島県）が十七名の兵隊を連れて二中隊陣地に現われた。「三中隊は全部でもこれ丈けです。重傷の部下にせがまれて到々此の拳銃で殺して来ました。敵を殺したろと思つて持つて来た此の拳銃で真先に自分の可愛い部下を殺さねばならぬとは……。」と暗然たる顔で児玉軍医に話しかけた。其夜七時頃戦闘指揮所より伝令が各隊に走つた。

「敵上陸以来既に五日間我が将兵は優秀装備を誇る十部に余る敵軍を迎えて勇戦奮闘、敵に多大の損害を与えたるも我も亦将兵相次ぎて斃れ、弾薬又欠之を告げるに到れり。茲に於て我は残存せる全兵力を以て今夜半を期し敵に最後の突撃を加えんとす……。」

最後の突撃命令である。兵は傷付いた足を引きづり戦友にすがりつつ攻撃準備地点に向つた。

遠日の損害により、此の突撃に加わり得たものは将校約十名、兵百五十名を出なかつた。

此の狭小な地域に集中する敵砲弾により行動は甚しく阻害されて意々出撃したのは四月二十一日午前三時頃であつた。井川部隊長、諏江大尉の指揮する主力二隊は此の数日間幾多戦友の血潮を吸つた学校高地方面を攻撃して亡き友の弔い合戦をせんとし、草牧中尉以下の二中隊生残りは飛行場方面に斬込む可く照明弾の照らす夜の野へ、闇々として壕を出た。

此の夜敵戦車は昼間より引き続き城山を取巻き、遂に城山東麓に群がる戦車群より射つ機銃車砲と機銃は城山の東斜面と南斜面を吹雪の如く吹き払つていた。指揮班員を率いて壕を出た一中隊長吉岡中尉（熊本県）は此の弾雨の為めに斃れ、その外一中隊、本部の将兵の多くが此のために無念にも傷付き或は戦死した。



学校、女山前面には最後の激闘が展開された。敵戦車よりの機銃声と友軍の小銃声が聞こえた。敵は此の線に戦車の列を敷いていた。その嵐の如く吠え猛る弾雨の為め、味方は次々に斃れた。井川部隊長も学校前面に於て敵弾を左上腹左胸部に受け、最早是迄と持つた拳銃により従容として見事な自決を遂げられた。飛行場方面に向つた草牧中尉もその夜の突撃に散つたと聞く。

既に何時しか夜は明けていた。敵は高地より狙い撃ちして来る。生き残つた者は止むなく各所の壕に入つて夜を待つた。斯くて指揮官を失い、戦友と別れた下士官兵は其後数人宛昼は壕に潜んで夜になれば出て敵陣に斬込みを加えた。

「一日でも長く敵の伊江島完全占領を妨害し、一人でも多くの敵兵を斃せ」との部隊長の訓詞に生きて飢えに耐え渇に苦しみ、痛みをこらえて遊撃戦は尚長く続けられた。

## ※※※附記※※※

米誌「伊江島デイリーニュース」九月三日号より

伊江島は硬くに難い果実であつた。　球列島に関する戦況報告は沖縄本島にのみ集中されているが、伊江島攻略はその困難な点に於て他の二つの島、既ち「ガヤレン」島及び硫黄島に於ける血醒い戦闘と頭を同じくするものであつた。ニューヨークの誇り第七十七師団は五日……にわたる手強い戦闘の後伊江島を攻略した。伊江島攻略は日本本土進攻の際の空よりの路を拓く点に於て重要であつた。伊江島占領に於ける最も難儀な事は伊江城山の制圧にあつた。報告者は此の山を地獄の山と呼んだ。此の山は海抜六〇一呎、コンクリート（珊瑚礁）の家々の部落の背後に聳えて、三群のトーチカがこれを取囲み、全山が砲座と変つていた。全体が地下隧道により連絡されて、堅固な要塞を形成し、此処に五千の信念に凝つた日本兵が坐つていた。

伊江島は東西五哩、南北二哩半、硫黄島より稍々小さくその守備は硫黄島と同様に堅固であつた。そして硫黄島攻略には三ケ師団が上陸したが、伊江島には一ケ師団がその攻略に従事した。エーデイー、ブルース少将の率ゆる第七十七師団は後敏な日本軍と相対した。日本軍はあらゆる物を欺装して丸一ケ月の間完全にすべてを隠蔽していた。そして我々第七十七師団の揚足を取らんと図つていた。彼等は島の西部に於てはわざと弱り抵抗を示した。それで我々は西部海岸を突破して伊江城山周辺に備えられたる敵の牙城へ鼠の如く突進した。然し七十七師団は盲目的な無理な攻撃はしなかつた。彼等は四月十五日上陸し、十六日朝飛行場を攻略し、注意深く進んでその日の午後城山の敵の虎穴へ進んで行つた。斯くして瞬時にして血みどろな闘争が展開された。日本軍はその既設陣地より七十七師団の喉元を見下して其処へ弾雨を注いで来た。然しながら日本軍は充分の武器弾薬を持つていなかつた。四月二十一日我々は伊江島を占領した。然しながら戦闘がそれで終結したのではない。分散的な遊撃戦は其後も続いて七月三日迄継続した。

14

## 伊江島女子救護班

戦雲急を告げた昭和二十年二月下旬、伊江島民間の主脳者と軍との提唱で伊江島少年義勇隊、伊江島女子救護班、伊江島婦人協力隊が夫々編成された。全く各人の自由意志により募られたが、義勇隊約二十名、救護班百四十名、協力隊六十名許が集つた。そのうち救護班は十七才より二十五才迄の独身の女子で教育を受けて戦闘中衛生兵を助けて衛生方面の手助けをなし、協力隊は二十五才以上の婦人で軍の炊事等の雑役を行うのである。編成と同時に教育が開始せられ、毎夜教時間宛衛生部員により各隊に亙る教育が実施せられ、予想される実戦に直ぐ役に立つ様に教える方も習う方も真剣に導り悲壮な気持で勉強した。情勢は日に悪く、住民の避難疎開は行われて班員の母も妹も毎日の様に海を越えて本部半島へ渡つて行く。恋しい肉親と別れて故郷とは言え戦雲最も烈しき一小離島に世人が地獄の如く恐れる伊江島に踏留まる娘達の胸中には既に死を決した崇高なものがあつた。父親に頼まれて軍医が避難疎開をすすめても友と共に兵隊と共に故郷で死にたいと言つて肯じなかつた娘もあった。

愈々敵が上陸して激闘が繰返されたがその間救護班員は各隊の各壕に三人四人と配置されて数少い衛生兵を助けて兵隊の治療に看護に献身的努力を捧げた。男も顔をそ向ける様な酷い負傷が多かつたが、震える手を制しながら兵を慰めいたわりながら白い包帯を巻いているうら若い娘達の姿はいぢらしくも又尊いものであつた。伊江島は水の非常に乏しい島である。激闘から帰り激闘に出て行く兵の第一に要求するものは水であつた。救護班員は協力隊員を助けて夜毎々々村の中へ出て水を運んだ。砲弾に荒されて道もなくなつた廃墟の中を照明弾が上れば伏し、砲弾が落ちれば匍つて行く水汲みは全く命懸けであつた。然し誰も苦しみを訴えなかつた。いやそんな[redacted]を言う暇もない程に忙しい日が続いたのである。

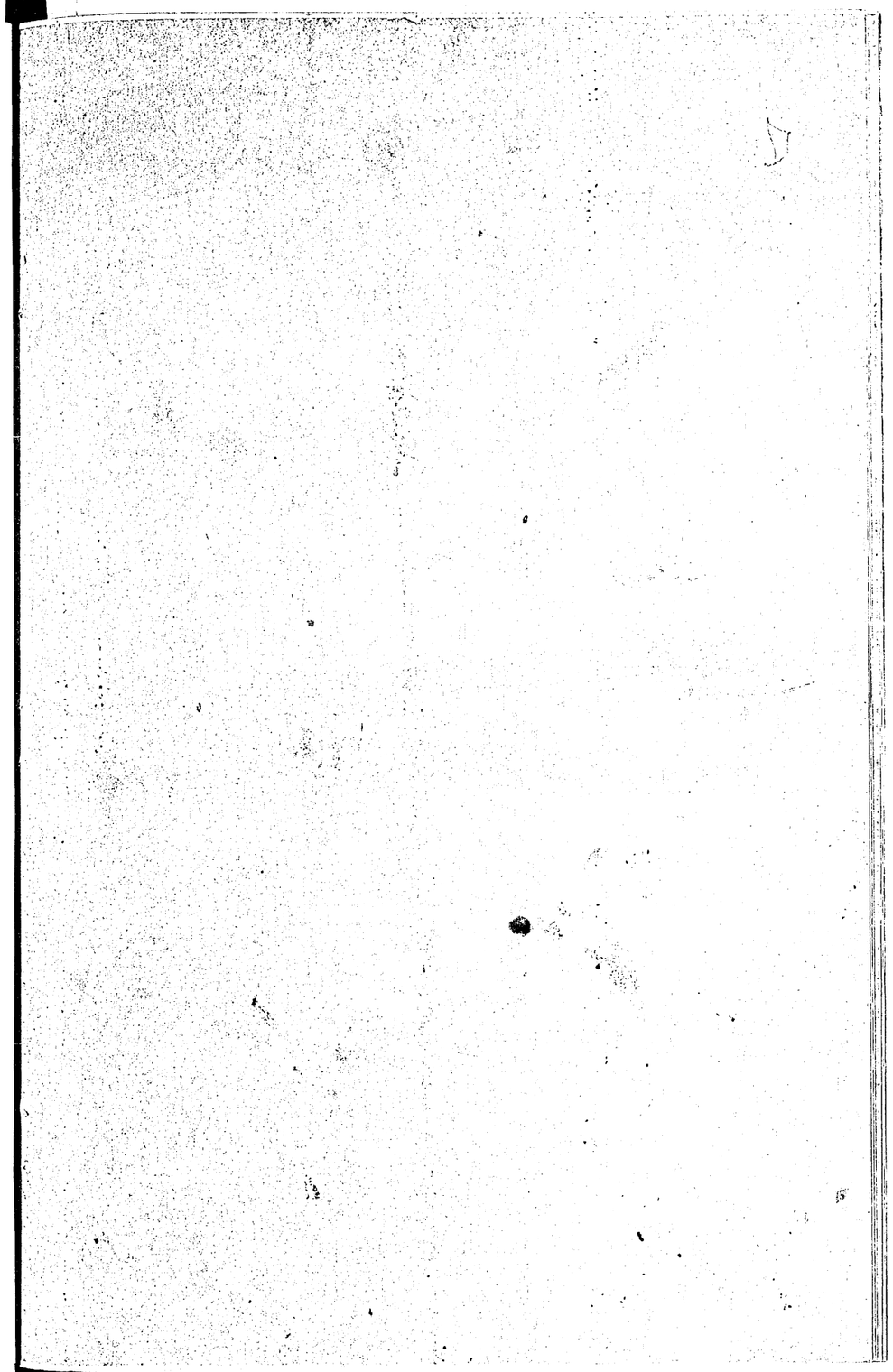
独立機関銃中隊の壕が粉砕して班員四名が最初の尊い犠牲となつた。「モヤト原」分遣隊の悲壮な最期の日五名が兵と死を共にした。学校高地での激戦には昼間兵と共に戦線に立つ者もある。部隊の最後の突撃の際には多くの者がその突撃行に加わつた。斯くて二百名の救護班員、協力隊員の殆んど全部が部隊と共に伊江島に散つたのである。

一、皇国のつわものを（スメラミクニ）
助けて共に故郷を
守らんものと群いたる
花も恥らう百数十
その名伊江島救護班

二、日ねもす励む看護りや
疲れを医やす暇もなく
夜毎に群うランプ辺に
習う担架や止血法
三角巾の影淡し

三、時は弥生の中の頃
衆敵侵す父祖の土地
空に敵機の数知れず
敵艦島を取巻きて（グスリ）
仰ぐ城の山怒る

四、夜昼分かぬ奮闘に
傷つく兵をいたわりつ
命とたのむ真清水を
運ぶ夜路に弾雨くく
友呼ぶ声も途絶えがち

五、激戦既に週を越へ
忠勇比なき皇軍も
衆敵のため弾尽きぬ
是迄なりぞ我も亦
加わり行かん突撃令

六、嗚呼南涙に風荒れて
蘇鉄の花の落ちる
沖縄乙女の殉忠を
永遠に伝えてむせび泣け
伊江城山（シロヤマ）の松風